氏名	吉村　幸子
ヨミガナ	ﾖｼﾑﾗ ｻﾁｺ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第434号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　〈存在のゆらぎ〉　－空気とかたち－
	〈作品〉　・うつろい
	・うつろい－グランドキャニオン
	・うつろい－ピアッツァ・コルドュージィオ広場Ⅰ
	・うつろい－ピアッツァ・コルドュージィオ広場Ⅱ

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	梅原　幸雄
（論文第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤　道信
（作品第１副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	関　出
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	手塚　雄二
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	斎藤　典彦

（論文内容の要旨）

私は、よく晴れた日よりも、曇りや雨、雪の日に流れる不思議で深々とした淋しい気配を好む。また、空気、水、光や風などの自然の構成要素と、温度や湿度による自然界の条件によって、「存在」するものが曖昧になる時間にとても惹かれる。それは、時の流れの中のほんのひとときのことであり、色彩も形態も朦朧となり、時に、闇や光、影や陽へと、互いに交錯しながら移行していく。山、川、草、木、花など、人は、目にするものを存在として認めることに馴れているが、自然の構成要素と自然界の条件が織り込まれる事により、それらが必ずしもそれ固有の形象で認識できるとは限らない

私は「存在するものが、必ずしもそのものの形象で目の前に現れるとは限らない」という言葉をキーワードに、今日まで日本画制作に取り組んできた。「存在するもの」とは自然や人、人が創ったものであり、いわば「ある」ものである。しかしそれぞれが本来持っている姿や色、つまり私の目の前に「存在するもの」が、それ本来の姿現れるとは限らない。同じ一つの存在が、時の流れや自然現象の中で、さまざまな表情を纏って私の前に現れる。さらに「見えないもの」も、存在として認められており、パウル・クレーは、「芸術は見えないものを再現するのではなく、見えるようにする」ものという有名な言葉を残している。つまり、見えるものを用いて見えないものを見えるようにする、ということである。私にとって、見えるものよりも見えないものに対しての方が興味の対象となる。例えば、「空気」という不可視なものも「存在」として認められており、それを見ようとする行為は、存在しているもの（見えているもの）に対して何らかの視覚変化をもたらしているように思える。空気が存在を包み込み、「もの」と「もの」との間に漂い、私の心情で、存在しているものの見え方が変わってくる。心もまた、不可視で「かたち」はないが「存在」として認識されており、空気と似ている。空気は、視覚では認識する事ができないが、全身で感じる事が可能であり、私が感じる空気により僅かに動く自身の心が、存在しているものをゆらがせているのではないか。

本論文は、「存在しているものが必ずしもそのものの形象で目の前に現れるとは限らない」という自身のキーワードを基に、「存在」をゆらす要因として、物理的存在としての「空気」と、心理的存在としての「空気」、その２つの空気に関連する水や時間、光など自然界の要素が、自身の「心のゆらぎ」と交錯することで生まれる新しい風景を考察した。私が行う芸術活動は、現実の模倣でも、「存在するもの」の再現でもなく、筆者から見た「存在のゆらぎ」を表現することである。そして「存在のゆらぎ」と自身の「心のゆらぎ」の関係

を明快にすることで、今後の作品制作への指標とすることを目的とした。

第一章では、まず「存在」について考察する。古代ギリシャの存在論と、東洋哲学、特に仏教の般若心経の有名な語句「色即是空」「空即是色」と老荘思想から、観念的なものの見方を排除した私の絵の中での「存在」とは、どのようなものかについて探った。そして、実体はないが、存在として認められている「空気」を物理的側面から追った、ターナーと朦朧体の「空気」表現を考察した。また「空気」を心理的側面から検証し、見えないものの可視化表現として、キュビズムと、非言語表現として絵画と共通し自身の感覚に大きな影響を与えたとクラシックバレエ、中でも同じ20世紀に発展したコンテンポラリーバレエを例に挙げ、自身の内面表現について述べた。

第二章では、前章で述べた物理的、心理的側面からみた空気に関わる、自然界の条件や要素に焦点を当てた。「水」「時間」「光」の要素は、存在しているものと関わる事によって様々な「かたち」として現れることが可能になるが、同時に、存在しているものの「かたち」を明確にも不安定にもし、絶対的なものではなくする。それは、この要素に「かたち」を与えることで「存在」はゆらぐと言える。「水」「時間」「光」を各方面から検証し、「存在のゆらぎ」との関係性について考察し、本論文の主題である「ゆらぎ」について、科学からの検証と古代人の考え方を述べた。

第三章では、自身の作品から、「存在のゆらぎ」の表現について考察した。そして、存在のゆらぎの本質にせまり、自己の絵画との関わりを述べた。自身の作品の中で「空気」は重要な位置を占めているが、「水」「時間」「光」の要素も、絵を創る上でなくてはならないものである。空気を軸に、３つの要素を画面上で自在に操ることで、現実に在るものを消し、時に強調することで「存在のゆらぎ」を示す。そして、「存在のゆらぎ」の本質を述べ、「心のゆらぎ」から得た題材をもとに日本画を制作する課程と、そこでの「空気」と「水」「時間」「光」の関わり合いから「存在のゆらぎ」と「心のゆらぎ」との関係性を明快にし、今後の制作の方向性を探った。

（博士論文審査結果の要旨）

本論文は、「存在するものが、必ずしもそのものの形象で目の前に現われるとは限らない」と考える筆者が、見え方の違いを「存在のゆらぎ」と捉え、その現象と自身の表現との関係を論述したものである。

論文構成は、正攻法のオーソドックスなものとなっている。まず第1章で、「存在」じたいの定義を、ギリシャ哲学、仏教哲学、老荘思想にさぐり、それをゆらがせる要因としての「空気」を、物理的「空気」、心理的「空気」の両面から分析。第2章でさらに、存在のあり方や見え方にかかわる、水、時間、光について分析し、第3章で自作品を解説している。「存在」という難解な設定の論証に苦慮している感もあるが、印象派や朦朧体など具体的事例からの論述は読みやすい。

筆者がこうした問題に関心を抱いたそもそもの理由は、色彩や形態が曖昧になる曇りや雨、雪などの風景にひかれたことにあるという。とくに壮大な風景が霧で真白に一変したグランドキャニオンでの体験は、修了展の出品作として「まだ早いと危惧」しながら挑戦し、「新たな目標になった」とする、最重要テーマであることがわかる。実際に筆者が描いてきた作品の多くは、自然や都市のかすんだ光景である。こうした移りゆく曖昧な情景、循環や生成消滅の自然観を描いてきたのは、水墨画や、筆者が本文で言及する朦朧体、ターナーのカラービギニングなど、水性の淡彩表現だった。しかし岩絵具・膠彩による筆者の厚塗表現は、そうした19世紀までの文脈ではなく20世紀、とくに戦後の文脈上にある。筆者が本文中でピカソやポロック、コンテンポラリーバレエなどを論じているのも、その意識が20世紀の現代美術の延長上にあることを示し、とくに筆者はパウル・クレーの「美術は見えるものを再現するのではなく、見えないものを見えるようにする」のだということばに共感している。自作も、曖昧な自然現象の“再現”が目的ではなく、「存在のゆらぎ」を通して「心のゆらぎ」を表現することにあることを述べている。

審査会では、筆者の作品の造形力への高い評価が相次ぐ一方、論文については審査員の質問から筆者の新たな側面が明らかになる場面がしばしばあった。それは、本論文で言及不足の点があることを示してもいた

が、同時に筆者自身、無意識のうちに吐露している創作表現の奥深さを示す興味深いでき事でもあった。そのため表現同様、筆者のコンセプトも今後変化していくことが予想されるが、現時点の考えを詳述した努力の見える学位論文として、審査会で合格と判定された。

（作品審査結果の要旨）

本研究作品「うつろい・・・」の各々は、実在の風景を対象として絵画表現されたものだが、「存在するものが必ずしもそのものの形象で目の前に現れるとは限らない」という、申請者自身の体験を起程とした画想によって裏付けされた研究成果となっていた。そこには直接的には見えない大気をはじめ、光、水によって刻々と景色が変貌する様態を見つめるなかから、多くの示唆によって気付いたことを制作に反映させようとする意図があり、いわゆる具体の説明に止まるものではないと、申請者は表明している。そして、画面に描いた形態の境界を曖昧に、空気の中に溶け込むように、存在しているものを霞ませたという。靄がかる広大な景色をまえにして、あるいは誰一人、人のいる気配のない静けさの漂う西洋の街角にたたずみ、何を見取っていたのか。申請者が要点とする「存在のゆらぎ一空気とかたち一」を表現するうえでの抽象性は、境界の曖昧さではなく、むしろ、単純化した形態を構成してしっかりと描き、それを下地に、微粒子の顔料で淡く覆い、感覚的に受け留めた気配としているところにあった。近年の画面の多くは、明るい黄土や肌灰色系の色調で、顔料の定着も発色もよく、光彩を放っていた。また、制作の支持体（基底物）として、これまでに多様な和紙（白麻紙・赤麻紙・西ノ内紙・石州紙・土佐麻紙・雲肌麻紙など）を用いて、絵画組成における材料研究の一端もうかがえた。今後、制作手法が定型の域に安んじてとどまらず、展開を期待したい。審査した作品「うつろい（130.3×194cm）2013年」は、真冬の夜の有様がきっかけだが、冬の目黒川を画面中央に大きく配置し、澄んだ夜明けの空気を表現したもので、至って穏やかで繊細な情景である。作品「うつろい-グランドキャニオン（540×154cm）2013年」は、六曲一隻の屏風形式によるもので、雄大な景観を相手に、現場で感知した「存在のゆらぎ」を自らの課題とした作品である。意欲作ではあるが、申請者が心寄せる神秘的な空気の描出には未だ達していないとみられる。

「うつろいーピアッツァ・コルドゥージィオ広場Ⅰ、Ⅱ、各（145.5.0×112cm）2013年」は２点で一対並列の作品であり、僅かな隔てを超えて漂い繋がる「空気」を意図した作品である。建物の直線的な形態と量感、画面に大きく占める路面とトラムの鉄路、空の色とかたち、それらによる構図は、絵画的に省略や強調された空間の魅力として秀作となった。

これらの審査対象の作品には一貫した研究の蓄積による成果が示され、絵画表現において優れており、水準に達しているものと全員で判定した。

（総合審査結果の要旨）

申請者吉村幸子は、東京芸術大学日本画科を卒業後、大学院に進み修士過程を主席で修了し、修了作品「空蝉」は大学買上げとなった。

博士過程に進んだ頃から、都会の風景を、空気感を主に四季、時間と共にうつろいゆく変化をモノトーンで描くようになる。その画面からは、人は描いていないが都会の中の人の気配を感じる憂いがあり、湿り気のある空気が魅力的な画面の絵を意欲的に制作してきた。

学位論文にも早くから取り組み、「存在するものが必ずしもそのものの形象で目の前に現れるとは限らない」という言葉をキーワードとして、〈存在のゆらぎ〉－空気とかたち－と題し、見えないものを心の目で見つめ、「存在のゆらぎ」と「心のゆらぎ」の関係を考察し論じようと試みている。

提出作品1.「うつろい」(130.3×194.0cm) 2013年、2.「うつろいーグランドキャニオン」(540.0×154.0cm,

六曲一隻）2013年、3.「うつろいーピアッツァ・コルドゥージィオ広場Ⅰ・Ⅱ」2013年は、博士審査展に合わせてほぼ同時に描き上げた力作である。特に2.「うつろいーグランドキャニオン」は、申請者が論ずる「空気とかたち」を表現する上で最も適した対象であると共に、難しい課題であるが、見えないものとしての空気を表現しえた努力作である。

申請者の作品全体に流れる空気感は、日本の湿気の多い大気ではなく、西洋の澄んだ空気であり、大観よりターナー、日本舞踊よりバレエのように西洋の影響が大きいと思われる。

2012年、10月17日論文査読会、12月2日作品審査会、12月15日博士発表展での論文発表の後、口述最終試験を経て、提出された博士論文及び作品共に優れていると判断し、全員一致して高く評価し合格と判断した。ちなみに、博士展において野村賞を受賞している。